

2015年11月22日 礼拝メッセージ

聖書：第一ヨハネ3章13～24節

説教：互いに愛し合う

1 愛することができない

16節に「ですから私たちは、兄弟のためにいのちを捨てるべきです」とあります。これを穏やかな心で読める人はどれだけいるでしょうか。あの人のためなら死んでもよい、と思うことはあるいはあるかもしれません。しかし、あいつのために自分が死ぬなどんでもないと思うこともしばしばあります。

そんな私たちに対して23節では、「神の命令とは、(中略)キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです」とあります。加えて14節にも、「兄弟を愛さない者は死のうちにとどまっている」とあります。私たちが互いに愛し合うべきであることは、ここにお集まりの皆さんであれば知識として知っているはずです。救われた者であるなら、死からいのちに移されたはずです。けれどももし兄弟を愛せないのであれば、まだ死のうちにとどまっていることになります。救われていなかったということになります。もしそうなら、大変なことになります。

そんな大げさなことでもなくとも、もっと人を愛せる人になりたいと願ってはいるのだがなかなかできない、そんな悩みを抱えている方が沢山います。いったいどうしたらよいのでしょうか。今日はそのことを考えていきます。

2 神の命令・恵み

1) 御子イエス・キリストの御名を信じる

23節を読みます。「神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリ

ストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。」

ここでは、神の命令は二つあると言っています。一つは、御子イエス・キリストの御名を信じること。この方が私たちの罪の身代わりとなって、十字架でさばきを受けられ、死んで三日後によみがえられた。そのことを信じなさい。

なぜ信じなさいと言われるのか。言うまでもなく罪から救われるためです。こう言うところある方は、私はそんな罪など犯していないから救われる必要はないと反論します。その気持ちはわかります。私も救われる前は同じことを言っていました。

けれども、私たちが罪人であるという動かし難い証拠があります。人は必ず死ぬ。それが証拠です。どうしてそれが証拠なのかと思うでしょう。神が人を造られたとき、死というものはこの世界にありませんでした。けれどもアダムとエバが神に逆らった結果、神はこう言われたのです。「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」(創世記3章19節) このことばによってそれ以来、人は死ぬ者となりました。死こそ私たちが罪人である証拠です。

このように罪によって苦しんでいる人間を、神は救おうとお考えになりました。しかし、そのためには乗り越えなければならない大きな問題がありました。神は真実で正しい方ですから、罪は罪として正しくさばかな

ればなりません。でもそれをしてしまったなら、私たちは滅ぼされて終わりです。私たちを救いたい。けれども、罪をさばかなければならない。矛盾です。どう考えても人間の知恵では、この二つのことを同時に解決することはできません。しかし神はこの問題を乗り越えるために、ある一つの方法をとられました。私たちをさばくのではなく、その代わりにご自身のひとり子を身代わりにして十字架でさばくという方法です。このようにして救われたのだから、あなたがたは十字架にかけられた御子イエス・キリストを信じなさいと語っていただきました。

それが一つ目の命令だと言われます。しかし、命令されたから信じると言う人はまずいません。普通、「命令」は言われた側してみれば重荷になるものです。けれども信じるのが重荷になるはずはありませんから、ここは「命令」ではなくて、むしろ「恵み」と言い換えても良いと思います。

2) 互いに愛し合う

二つ目の命令は一すなわち二つ目の恵みと言ってもいいと思います—23 節の後半になります。「キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。」

互いに愛し合うということは、当たり前のことですがひとりですることではありません。相手があります。その相手のことが私たちの悩みの種となっています。あの人からきついことばを言われた。この人から無視された。いじめられた。中傷された。誤解された。あるいは逆のこともあります。自分のほうから相手に対して失礼なことを言ってしまって取り返しのつかない問題になった。ついいらして、厳しいことばを相手に投げつけて

しまった。それ以来その人との関係がぎくしゃくしてしまった。そういうことで悩むこともあります。

とても互いに愛し合うどころではありません。こんなに苦しむくらいなら、だれにも邪魔されないひとりだけの世界に行けたらさえ願うこともあります。

どうしてこうも人間関係のことで苦しむのでしょうか。これにも罪が関係しています。アダムとエバが罪を犯したとき、アダムは神の命令に背いたことは自分には関係がないと言い張り、エバに罪の責任を押しつけてしまいました。そうやって人類最初の夫婦げんかが始まったのです。その状態がそのまま私たちに受け継がれてしまいました。妻や夫との間がぎくしゃくしているのに、ほかの人に対しては互いに愛し合うという関係が築けるとはとても思えません。いったいどうしたらよいのでしょうか。

3 愛する

1) 「好き」とは違う (20 節)

そもそも「愛する」とはいったいどんな意味でしょう。日本語で「愛する」は、男女の関係のことで使われることが多いでしょう。その他にも「読書を愛する」とか「車を愛する」とも言います。ですから、「愛する」はほとんど「好き」という意味に近いと言ってよいでしょう。ですから聖書を読むときにも「愛する」ということばが出て来ると、すぐに頭の中で変換装置が働いて「人を好きになること」だにとらえてしまいます。もちろんそのような意味もあります。けれども、それでは聖書の「愛する」を誤解してしまうことになります。

そのことが20 節前半にあります。「たとい

自分の心が責めてもです。」これは18節の、兄弟を口先だけでなく行いと真実をもって愛すべきですというところとつながっています。心の中で「いやだな」「あの人好きではないのだが」と後ろ向きな思いが起きることがあると思います。聖書では、困っている兄弟を見たときに、この人は好きではないと思ったとしても、あわれみの心を閉ざしてはいけません。それが愛するということだと言っています。ですから「兄弟を愛しなさい」というのは、「兄弟を好きになりなさい」と言っているのではない。無理に好きになる必要がない。そこで少し安心していただけたかと思えます。

とはいえ、兄弟のためにいのちを捨てるほどの愛がないことには変わりありません。たとえ難しくても神の命令なのだから、私たちは努力して愛さなければならないのでしょうか。もしそうだというのなら重荷です。何度も言いますが、神の命令は絶対に重荷にはなりません。先ほども触れたようにむしろ「恵み」であるはずです。なぜ「恵み」と言えるのか、そのことを最後に見ていきます。

2) 御霊の二つの働き

罪の影響は人と人との関係を壊す方向に働いていきます。その影響から逃れられる者はひとりもいません。たとえ救われていたとしてもなお、罪は私たちに影響を与え続けます。そんな私たちに神は、「兄弟を愛しなさい」と言われます。神は、私たちが簡単に人を愛せるはずだと思いのなかでしょうか。いえ、20節にあるとおり、「神は私たちの心より大きく、そして何もかもご存じ」です。兄弟を愛せない者であることもご存じのは

ずです。人間の努力によっては、絶対に人を愛することができないと知っておられます。

ではどうするのか。その解決が24節の後半のことばにあります。「神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知るのです。」

23節で、神は二つの命令—あるいは恵みとも言うていいでしょう—を私たちに与えたことを見ました。ところが神が与えてくださったのはそれだけではない。もう一つあります。「神が私たちに与えてくださった御霊」とあります。御霊も同時に与えてくださいました。

この御霊には二つの働きがあります。一つ目。御霊は私たちのうちにおられて、御子イエス・キリストを信じることができるように働いてくださいます。命令されて信じるのではなく、御霊が働いてくださって信じるようにして下さる。だから恵みなのです。この恵みによってほんとうの愛がわかりました。本物の愛を知ったとき、私たちのうちにはちっぽけな愛しかないことに気がつきました。どんなにがんばっても兄弟を愛することなどできない自分であることがわかりました。

だから主は私たちに御霊を下されたのです。御霊は私たちのうちにおられて、兄弟を愛するように励ましてください。これが御霊の二つ目の働きです。

ときどき、「今日から私たちは兄弟を愛する人になりましょう」というかけ声を聞くことがあります。その後それができたという話を聞いたことがありません。そんなものなのです。兄弟を愛せない。兄弟のためにいのちを捨てることができない。神の愛を知っているのに強くそのように思います。だから、

私たちにできることは、ただ一つです。人を愛せない者ですと正直に神に申し上げてください。告白してどうなるのでしょうか。何も変わらないのでしょうか。ちがいます。私たちの目には、何の変化もないように見えるかもしれませんが、けれども聖霊が働いてくださっています。聖霊は私たちをつくり変えていきます。今はできないかもしれませんが、でもやがて変えられていきます。ですから今の「できない」という自分だけを見て嘆く必要はありません。これから先のことをゆっくりと見ていけばいいのです。神は真実で正しい方ですから、神を信じる者を必ずあわれんでくださいます。